明治期の経済学者と「人名辞典」

田　口　照　美*

はじめに

経済資料協議会で数年前より編集活動をすすめている『日本経済資料ハンドブック』の「人名辞典の部」を担当し，そのデータベースを作成する過程で，田口卯吉（鼎軒）の編集した『大日本人名辭書』（基本文献Ⅰ）（以下では『辞書』と略記する）に出会った。『辞書』は，明治18年の初版以来増訂を重ねて11版にまで及ぶわが国における人名辞典の嚆矢といわれるものであり，これに経済学分野との関連において検討を加えることとした。

ここでは，人名辞典が明治期の経済学者をどのようにとり上げているかを分析し，かつ，これから経済学史・経済思想史を学ぼうとするいわゆる初学者が，先人の著書や伝記的事項について知りたいと思うとき，人名辞典はどのように有効に利用できるのか，その場合どういう注意が必要であるかを明らかにすることを目的とする。

この作業では住谷悦治著『日本経済学史』（基本文献Ⅲ）の巻末に付す「年表」と人名辞典とを対比することとして検討を試みた。『日本経済学史』は，著者の「あとがき」に「外国の学説を咀嚼し，それを身につけてわが国の経済を分析究明し，科学としての経済学の諸理論諸範疇の理解を深化し，あるいは経済政策を樹立しようと苦心した先輩諸学者の学問的精進のあとを辿り，あるいは，その思想的性格について考察することは極めて大切なことであると思う。」[1] と述べ，「明治維新以後から第一次世界大戦ごろまでを社会的背景として」[2] 目次には，例えば3章で「イリス自由主義経済学と神田孝平」，4章「福沢諭吉と自由主義経済学の基礎づけ」，5章「若山儀一と大島貞益―保護貿易論の紹介と主張」，7章「田口鼎軒と自由主義経済学」等々，多くの経済学者をピックアップして学史的に論述している。巻末には「年表」として，明治期に刊行の経済学文献を年次順に配列しているため，人名辞典との比較が容易であることから，今回，実験としてこの「年表」を用いて人名辞典の分析を試みた。

なお，平凡社発行の『大人名事典』（基本文献Ⅱ）（以下では『事典』と略記す

＊　たぐち　てるみ　一橋大学経済研究所日本経済統計文献センター

1)，2)　住谷悦治：基本文献Ⅲ　p.426

る）の各版を，『辞書』に匹敵する昭和期刊行の代表的人名辞典として検討の対象に加えた。

1．人名辞典による学説史的展開

「年表」は，文久元年（1861）から大正7年（1918）までに刊行された経済学文献520タイトルとその著者・訳者を年次別に配している。そこで，「年表」に登場する経済学者が人名辞典に最初に収録されたのはどの版次であるかを調査し，収録版次と著書の刊行年の time lag をも示すこととした。

「年表」に著者・訳者として記載されている人物268名[3]の全てをカード化した上で，「年表」中の全文献（520タイトル）をそれぞれの著者別カードに記入する作業を初めとし，その著者が人名辞典に収録されているか否かを，『辞書』・『事典』の全ての版について調査を行った。結果は，いずれかの版に一度でも収録されたことのある人物は127名（全体の約47.4%）となった。辞典別にみると，『事典』に収録されている人名は127名と同数であり，『辞書』に収録されている人名は72名（全体の約26.9%）であった。なお調査の結果，『辞書』に収録の72名は全て『事典』にも収録されていることを知った。

残りの141名（約52.6%）は，残念ながらどの版にも見出すことができなかった。このなかには収録されてしかるべきと思われる大島貞益，嵯峨根不二郎，若山儀一というような人物が含まれており，人名辞典の収録基準がどこにあるのか興味ある問題であるが，今回はこれらの点はひとまずおき，以下に両人名辞典の各版次別にみた初収録の経済学者（「年表」に記載されている著者名）を明らかにすることとする。

〈主表〉では，その版次で初めて収録された著・訳者名をヘボン式ローマ字によるアルファベット順に配列し，合わせて「年表」に採録されている著書と刊行年を刊行年次順に記載した。このように，明治期刊行の経済学文献を人名辞典と対応させて編成することにより，学説史的展望の便宜を図ることとした。なお，〈主表〉の文献のなかで，人名辞典の記述中に記載されている文献はゴシック体文字にて示した。翻訳書は，はじめに原著者名を記し書名の後に（訳）と記載した。今回の作業では，人名辞典の精度分析も試みる関係上できるかぎり目録等による文献調査を行い，「年表」の書名等に明らかな誤記・誤植がある場合には，必要に応じて現物による確認を行ったうえで正しい記述をし，その事項の直前に＊印を付すなど，書誌的記述には正確を期した。ただし，疑問があっても現物による確認ができなかったものについては，「年表」の記述をそのまま記載した。

---

3) 「年表」に著者・訳者として登場するのは267名であるが，現物調査の上『官版立会略則』の著者として澁澤榮一を新たにおこして加えた。

〈**主表**〉人名辞典の版次別にみた初収録の著者・訳者および書名一覧

Ⅰ　『大日本人名辭書』

版次・刊年	著者・訳者	書名[4]・刊年（B—文久　K—慶応　M—明治　T—大正）
初版　1885—1886（M18—19）	佐田　介石	『栽培経済論』M11　『栽培経済問答新誌』M14　『点取交通論』M16
再版　1891(M24)	石川　暎作	スミス『**富国論**』（訳）M17
	嵯峨　正作	モングレディアン『英国自由保護両党活劇史』（訳）M22
3版　1896(M29)	福住　正兄	『**富国捷径**』M7
	平田　延胤	『開国通商交易神考』M3
4版　1900(M33)	神田　孝平	『農商弁』B1　『増補農商建国弁』？　『**経済小学**』K3　『西洋経済小学』M1　『泰西商会法則』M2　＊フィセリング『**性法略**』(訳)[5] M4　『田税新法』M5　『**経世余論**』M12　『淡崖遺稿』M43
	箕作　麟祥	ジョンネ『統計学』（訳）M7
	西　周	ミル『**利学**』（訳）M10
	品川彌二郎	『信用組合提要』（共著）M31
5版　1903(M36)	福澤　諭吉	『唐人往来』K1　『**西洋事情**』K2　『西洋事情外編』K3　『西洋事情二編』＊M3　『**学問のすゝめ**』M5　『**文明論之概略**』＊M8　『民間経済録』[6] M10　『実業論』[7] M26
	中江　篤介	フートエー『**理学沿革史**』（訳）M18
	西村　茂樹	チェンバース『**経済要旨**』（訳）M7　『自由交

4)　書名欄のゴシック体文字による文献は，人名辞典（『辞書』9版・10版・11版と『事典』初版，復刻版「現代」編）に記載されている文献を示す。

5)　「年表」では翻譯書となっていないが，現物調査の上翻訳書とした。西周による序に「神田判官譯而梓之」とあり緒言に「政科大博士畢酒林氏ノ口述ヲ受ケ筆記セシ所ナリ」とある。

6)　「年表」には明治5年および10年に同一書名の記載があるが，「年譜」（参考文献〔15〕第21巻所収）および現物調査により5年は削除した。

7)　「年表」には明治21年および26年に同一書名の記載があるが，「年譜」（参考文献〔15〕第21巻所収）および現物調査により21年は削除した。

			易論』M8
6版	1909(M42)	圓城寺　清	『地租全廃論』M36
		福地源一郎	『官版会社弁』M4
		岸田吟香	『富国策』M14
		永田健助	フォーセット『宝氏経済学』（訳）M10　フォーセット『経済説略』（編訳）M12　レバッシール『農工商経済論』（訳）M14　『商業経済』M28　ギッビンス『欧州商業開化史』（訳）M29
		乗竹孝太郎	『経済学講義原理篇』M21
		田口卯吉	**『自由交易日本経済論』**M11　レブィー『大英商業史』（訳）M12　〔「東京経済雑誌」創刊M12〕**『経済策』**M15　マクラウド『麻氏経済哲学』（訳）M18　**『続経済策』**M23　『輸出税全廃論』M25　『帝国財政意見』M27　『財政と経済』M36
		横井時冬	『帝国商業史講義録』M25　**『日本商業史』**；**『日本工業史』**M31
7版	1912(T1)	栗原亮一	『革命新論』M16
		中島　雄	ブラウン『致富新論訳解』（共訳）M8
8版	1917(T6)	林　董	ミル＊『弥児経済論』（共訳）M8
		加藤弘之	**『交易問答』**[8] M2　**『真政大意』**M3　リーベル『自由自治』（訳）M9
		岡田良一郎	『活法経済論』M12　**『報徳富国論』**M13
		下村房次郎	＊**『日本之社会軋轢並救済法』**M26
		富田鐵之助	『銀行小言』M18
		山路愛山	**『社会主義管見』**M39
9版	1921(T10)	濱田健二郎[9]	『経済学史』[10]（共著）M27
		井上友一	『救済制度要義』M42
		呉　文聰	**『応用統計学』**M21　エンゲル『**統計の神髄**』

8)　「年表」には慶応元年および明治2年に同一書名の記載があるが，『明治文化全集　第12巻　経済篇』に収録されている同書の「小序」に，「……今度此一冊を著し以て世に公にせんとす。……明治二年己巳四月　加藤弘藏誌」とあるところから，慶応元年は削除した。

9)　両辞典の項目は「健次郎」とある。

10)　標題紙には「健二郎」，奥付には「健次郎」とある。

		（訳）M27　『理論統計学』M28　メーヨルスミス『社会統計学』（訳）M33　『戦後経営・人口政策』M38
	松崎蔵之助	＊『最新財政学』M45
	菅沼貞風	『大日本商業史』M25
	杉亨二	キイヒツ『交易通史』（訳）M5　『貿易改正論』M7　『杉先生講演集』M35
	土子金四郎	『経済学大意』；バスチア『経済調和論』（訳）；レヴィ『商業史』（訳）M20　シヂウキック『経済政策』（共訳）；バステーブル『外国貿易論』（共訳）M30
	内田銀蔵	『経済史』M31　『日本経済史の研究』M34　『日本経済史』M35
	和田垣謙三	『世界商業史要』M42
10版　1926(T15)	平田東助	ロッシア『商工経済論』（訳）M28　ロッシア『商工経済論』（共訳）M29　『信用組合提要』（共著）M31
	久津見蕨村	『無政府主義』M39　『クロポトキンの特色』M40
	小幡篤次郎	チェンバース『生産道案内』（訳）M3　ウェーランド『英氏経済論』（訳）M4
	大石誠之助	クロポトキン『法律と強権』（訳）M41
	大杉榮	クロポトキン『青年に訴う』（訳）M41　ルボン＊『物質非不滅論』（訳）；『生の闘争』T3　『社会的個人主義』T4　クロポトキン『相互扶助論』（訳）T6
	島田三郎	『社会主義概評』M34
	田尻稲次郎	ボリュー『財政論』（訳）M13　『経済学応用新論』M27　『経済史眼』M34
	田添鐵二	『経済進化論』M37　『近世社会主義』M41
	戸田海市	『我独逸観』M41　『工業経済』；＊『合同（かーてる及とらすと）』M43　＊『日本乃社会』；＊『日本乃経済』；『社会主義と日本国民』M44
	都筑馨六	『民政論』M25

11版	1937(S12)	江木　翼	『植民論策』M43
		藤井健治郎[11]	『唯物史観の解剖及其素成文』T3
		藤澤利喜太郎	**『生命保険論』**M22
		福田　徳三	**『労働経済論』**（合著）M32　『日本に於ける社会的及経済的発展』M33　**『国民経済原論』**M36　『社会主義研究の栞』M39　**『経済学研究』**；**『経済学講義』**；**『日本経済史論』**[12]（坂西由蔵訳）M40　『経済学教科書』M44　**『続経済学講義』**；**『続経済学研究』**T2　『改訂経済学研究』；『改訂経済学講義』T4　**『国民経済講話』**T6　『労働経済講話』；『経済学考証』T7
		堀江　帰一	**『貨幣制度論概要』**M35　**『銀行制度論』**M36　**『最新貨幣論』**；**『最新銀行論』**M37　**『国際商業政策』**M38　**『財政学』**；**『関税問題』**M42　**『中央銀行と金融市場』**M45
		犬養　毅	〔「東海経済新報」創刊M13〕　ケーリー『圭氏経済学』（訳）M17
		金井　延	『経済学』M27　『社会政策汎論目録』M29　**『社会経済学』**M35　＊**『経済学研究方法』**M45
		片山　潜	『鉄道新論』M29　**『英国今日之社会』**；『ラサル伝』M30　〔「労働世界」創刊M30〕　＊『社会改良手段普通選挙』；＊**『日本の労働運動』**（共著）M34　**『我社会主義』**；**『都市社会主義』**M36　『万国社会党』M38　〔「社会新聞」創刊M40〕
		幸徳　秋水	『廿世紀之怪物帝国主義』M34　『長広告』；『兆民先生』M35　**『社会主義神髄』**M36　〔堺利彦らと「週刊平民新聞」創刊M36〕　『社会民主党建設者ラサール』M37　**『平民主義』**；『日本社会主義史』（共著）[13] M40　〔堺利彦らと「日刊平民新聞」創刊M40〕　マルクス・エンゲルス『共産党宣言』（共訳）M41　**『基督抹殺論』**M44
		桑田　熊蔵	**『欧州労働問題の大勢』**M32　**『工場法と労働保険』**M42

11)　『辞書』と『事典』初版の項目は「健次郎」，『事典』改訂版の項目は「健治郎」とある。『辞書』の記事に「……京都帝国大学教授に任じ，後同大学文学部長に補せらる」とあるところより京都大学文学部に照会の結果，「健治郎」との回答を得た。

12)　1900年にドイツ語で出版した著作の坂西由蔵訳。

13)　現物は石川三四郎編，幸徳秋水補とある。

前田　正名	『所見』M25
武藤　山治	『米国移住論』M20
大森　鍾一	ボアソナード『経済学講義』（訳）M９
堺　　利彦	〔幸徳秋水らと「週刊平民新聞」創刊M36〕　ベラミー『百年後の新社会』（訳）M37　エンゲルス『科学的社会主義』（訳）M39　〔「**社会主義研究**」創刊M39〕　『社会主義綱要』（共著）；『社会主義大意』M40　〔幸徳秋水らと「日刊平民新聞」創刊M40〕　マルクス・エンゲルス『共産党宣言』（共訳）M41　『**売文集**』；『天下泰平』；『赤裸の人』M45　カウツキー『社会主義倫理学』（訳）；ショー『人と超人』（訳）Ｔ２
関　　一	『商業経済政策』M36　『工業政策』M44
澁澤榮一[14]	『官版立会略則』[15]Ｍ４
添田　壽一	『**応用経済論**』M21　『外国貿易論』；『外国為替論』M23　『増訂破壊思想と救治策』M44
左右田喜一郎	＊『**信用券貨幣論**』M38　『**貨幣と価値**』M42　＊『**経済法則の論理的性質**』M44　『**経済哲学の諸問題**』Ｔ６
田島　錦治	『**最近経済論**』；『**日本現時之社会問題**』；『近世社会主義論』；シヂウキック『**経済政策**』（共訳）；バステーブル『外国貿易論』（共訳）M30
高橋　五郎	『社会主義活弁』M36
高橋　是清	マーシャル＊『勤業理財学』（訳）M19
瀧本　誠一	＊『商家之腐敗』＊M21　『**経済的帝国論**』＊M34　『**日本経済学説の要領**』＊M41　『**日本経済叢書**』（編）Ｔ３　＊『**日本経済学史**』Ｔ７
徳富　健次郎	＊『理査土格武電』（纂訳）M22
内村　鑑三	『基督教と社会主義』M40
矢野　文雄	『社会講演』（共著）M35　『通俗新社会』；『**社会主義全集**』M36
湯川　寛吉	ロッシア『商工経済論』（共訳）M29

14)　澁澤榮一は著者として「年表」に記載されていないが，『官版立会略則』の本文第一頁に「青淵澁澤榮一述」とあるため，著者として新たにおこした。

15)　「年表」では福地源一郎の著書として記載されているが，現物確認の上澁澤榮一の著書とした。

Ⅱ　『大人名事典』

版次・刊年	著者・訳者	書名・刊年（B—文久　K—慶応　M—明治　T—大正）
初版　1937—1941（S12—16）	安部　磯雄	**『社会問題解釈法』**M34　『社会講演』（共著）M35　『社会主義論』M36　**『地上の理想国瑞西』**；『社会主義論』M37　『社会主義小史』M41　イリー『社会主義と社会政策』（訳）M42
	天野　為之	**『経済原論』**；『商政標準』M19　『経済学研究法』M20　コッサ『経済学史』（訳）M21　『銀行論』；コッサ『経済学研究法』（訳）M23　ミル『高等経済原論』（訳）M24　ケインズ『経済学研究法』（訳）M30　『経済学綱要』M35　『戦後の経済政策』T5
	粟津　清亮	『保険論集』M32　『保険綱要』M41
	平沼　淑郎	『通信教授経済学』M19
	本庄　榮治郎	『西陣研究』T3　『江戸幕府の米価調節』T5
	井上　辰九郎	『経済学史』M21　『経済考徴』M27　マーシャル『経済原論』（訳）M28　マーシャル『経済原論』（訳）M29　バステーブル『財政学』（共訳）＊M32[16]　**『外国貿易論』**M40
	伊藤　野枝	『婦人解放の悲劇』T3
	神戸　正雄	『累進税論』M34　『財政学講義』M35　ゾンバルト＊『19世紀に於ける社会主義及社会的運動』（訳）M36　『経済学講義』；『穀物関税論』M42　『財政概論』；『公債論』M43　『日本経済政策論』M44　『租税通論』M45　『日本経済論』T5
	金子　堅太郎	**『経済策』**M35
	加藤　政之助	トンプソン『交際論附経済』（訳）M11　タムソン『交際論付経済論』（訳）M12
	河田　嗣郎	『社会主義論』；『資本主義的精神』M43　ビェルソン『価値論』（共訳）[17] M44
	河上　肇	『日本尊農論』；＊『経済学原論』[18]；セリグマン

16)　「年表」には明治41年刊とあるが，共訳者である高野岩三郎の「年譜」および「著作目録」（参考文献〔22〕所収）と現物調査の上，明治32年刊とした。
17)　現物には「解説」とある。
18)　「年表」にはセリグマン『経済原論』（訳）とあるが，天野敬太郎編「河上肇著作目録（経済学の部）」（参考文献〔12〕）と現物調査の上，著作『経済学原論』とした。

	＊『歴史之経済的説明―新史観』（訳）M38 『日本農政学』；『人生の帰趣』；『社会主義評論付無我愛の真理』M39 〔「日本経済新誌」創刊M40〕 ＊『人類原始ノ生活』M42 『経済学の根本概念』M43 『経済と人生』；『時勢之変』；ビェルソン『価値論』（共訳）[19]；フエタア『物財の価値』（訳）M44 フィッシャー『資本及利子歩合』（訳）M45 『経済学研究』＊T1 **『経済原論』**；＊『輓近物價騰貴之一研究 金ト信用ト物価』；ファイト『唯心的個人主義』（訳）T2 『祖国を顧みて』T4 『法制経済教科書』（共著）T5 **『貧乏物語』**；フィッシャー・フィックス『如何に生活すべきか』（訳）T6 『社会問題管見』T7
河津 暹	**『商業政策』**M36 『経済私言』M45
氣賀 勘重	フィリッポビッチ『フィリッポビッチ経済原論』（訳）M37 フィリッポビッチ『フィリッポビッチ経済政策』（訳）M45
木下 尚江	『足尾鉱毒問題』M33
北澤 新次郎	『労働者問題』T7
小泉 信三	ジェボンス**『ジェボンス経済学純理』**（訳）T2
窪田 静太郎	『社会制度一班』；『貧民救済意見』M32
町田 忠治	コッサ『財政学』（訳）M22
松村 介石	『社会改良家評伝』M30
松村 光三	『賃銀論』M45
松崎 壽	『工業金融論』T2
宮崎 民蔵	『土地均享人類の大権』M39
村井 知至	『社会主義』M32
中川 小十郎	ボウカー『実用経済学』（訳）M23
中川 正左	『鉄道論』T5
小野 義一	『社会政策の根本観念』T4
長田 銈太郎	ブロック『初学経済問答』（訳）M20
尾崎 行雄	＊**『通俗地租改正私議』**M18
酒井 雄三郎	『排曲学論』M25
坂西 由蔵	福田徳三**『日本経済史論』**（訳）M40
阪谷 芳郎	『経済学史』M20

19) 現物には「解説」とある。

	佐々木 惣 一	『法制経済教科書』（共著）T 5
	佐 藤 寛 次	クロポトキン『農工業の調和』（訳）M45
	佐 藤 昌 介	イリイ『威氏経済学』（訳）M24
	清 水 澄	『社会主義と社会政策』M44
	白 柳 秀 湖	『鉄火石火』M41　『強者弱者』T 3
	鈴 木 文 治	『工場法釈義』T 3　『労働問題早わかり』T 5
	高 野 岩三郎	バステーブル『財政学』（共訳）＊M32[20]　『財政原論』M39　**『統計学研究』**T 4　**『本邦人口の現在及将来』**＊T 5[21]
	高 岡 熊 雄	『農業政策』M45
	高 田 早 苗	『租税論』M22
	高 田 保 馬	『分業論』T 2　『大数法論』T 4　『社会学的研究』T 7　**『社会学原理』**＊T 8[22]
	寺 島 成 信	『日本海運論』M26　『対外商工業』M41
	東 郷 實	**『日本植民論』**M32
	津 村 秀 松	**『国民経済学原論』**M40　**『商業政策』**M44　『国民経済原論』T 3
	上 田 貞次郎	**『外国貿易原論』**[23] M36　**『株式会社経済論』**T 2　**『戦時経済講話』**T 4
	浮 田 和 民	ラーネッド『経済学之原理』（訳）M24　**『倫理的帝国主義』**M42
	山 室 宗 文	『英米経済事情』M43　『社債論』M44
	山 崎 覺次郎	『経済原論』T 6
	柳 田 國 男	『時代と農政』M43
改訂版1953—1955（S28—30）	西川光次郎[24]	『社会党』；＊『日本の労働運動』[25]（共著）M34　『カール・マルクス』M35　『富の圧制』；『土地

20）「年表」には明治41年刊とあるが，「高野岩三郎年譜」および「著作目録」（参考文献〔22〕所収）と現物調査の上，明治32年刊とした。

21）「年表」には明治42年刊とあるが現物によると大正5年初版であり，その旨が大正11年の再版「序」にも見られるので，大正5年刊とした。

22）現物奥付には大正8年刊とあり，著者目録（参考文献〔36〕所収）にも大正8年刊とある。従って，本来なら採録対象外であるが，「年表」に大正7年刊として入っているため，刊行年を訂正のうえ特に記載した。

23）標題紙・奥付とも「上田貞二郎」とある。なお，「年表」には明治35年および36年に同一書名の記載があるが，「上田貞次郎著作目録」（参考文献〔26〕所収）と現物調査の上，明治35年は削除した。

24）『事典』項目は「光二郎」とある。

25）標題紙には「光二郎」，奥付には「光次郎」とある。

		国有論』M37　〔「東京社会新聞」創刊M41〕
	野村兼太郎	『経済的文化と哲学』＊T 9[26]
現代版[27]1979（S54）	石川三四郎	『消費組合の話』M37　『日本社会主義史』（共著）[28]M40　『哲人カーペンター』M45
	河上　清	『労働保護論』[29] M30
	煙山専太郎	＊『近世無政府主義』M35

2．人名辞典項目との同定

「年表」上の著者・訳者について人名辞典の調査をすすめていく過程で，最も困難を極めたのが『賃銀論』（M45）の著者，松村光三であった。

松村光三の名前は『辞書』にはなく『事典』で見出すこととなったが，記述のなかに著書の記載がなく，その記事内容からみて，『賃銀論』を著した松村光三と『事典』に収録されている松村光三と同一人物であると断定できるかという疑問を生じたのである。今回の調査過程を示す例として，その間の事情を少し詳しく述べてみよう。

『事典』初版（基本文献 Ⅱ (1)）には「明治十五年十二月生る」とあり同改訂版（基本文献 Ⅱ (2)）には「(1882—)」とあるから，この二つの版の間に生年の相違はない。ゆえに，両版に収録の松村光三は同一人物とみてよいであろう。改訂版の記事には「元衆議院議員。自由党所属。当選七回。日本学術振興会員。東京都渋谷区鉢山町三九（渋谷〇二三五）」とあるのみで，この記事からは経済書の著者としてのイメージは全く浮かんでこない。初版の記事はもう少し詳しく，「衆議院議員。明治十五年十二月生る。栃木県の人，先代光三の長子，初名は芳平。東京高商専攻科を卒業，のち渡独してベルリン高等商業，ベルリン大学に経済学を究めて帰朝。昭和三年以来栃木県第二区より推されて衆議院議員に当選すること五回，政友会に属し，総務たり。斎藤内閣には商工参與官に任ぜられ，現在，資源審議会委員に挙げられる。」とある。これでやっと『賃銀論』の著者として考えうる松村光三が浮かんできた。

現物調査のため国立国会図書館の所蔵カードを検索すると，「松村光三『賃銀論』1912刊」として確かに著書があった。しかし，困ったことに「松村光三は松村巨湫を

26）現物には大正9年刊とあり，著作目録（参考文献〔24〕所収）にも大正9年刊とある。従って，本来なら採録対象外であるが，「年表」に大正4年刊として入っているため，刊行年を訂正のうえ特に記載した。

27）『日本人名大事典　現代』（基本文献Ⅱ（4））を示す。

28）現物は石川三四郎編，幸徳秋水補とある。

29）標題紙は「川上清」，本文第一頁は「河上清」，奥付には「川上清」とある。

みよ」の参照カードが入っているのである。そこで松村巨湫のカードを見ると「松村巨湫（1895—）」とあり，明らかに『事典』の生年（1882—）と異なっている。念のため国立国会図書館編『著者名典拠録』[30]を調べると，やはり「松村光三⟶松村巨湫」とあり，「松村巨湫（1895生）雑誌記者，俳句雑誌経営「十六夜」《文》⟵松村光三（本名）」とある。所蔵カードと典拠録をみるかぎりにおいては，国立国会図書館所蔵『賃銀論』の著者松村光三は『事典』収録の松村光三とは同名異人となり，その結果「年表」に記載の『賃銀論』著者の松村光三は人名辞典に収録されていないこととなる。

ここで，『賃銀論』の現物をみると「松村光三　商学士」とあり，その自序に「…殊に稿本未だ其半ならずして著者は欧米各国視察の用務を生じ……」とあって，『事典』の記事に通ずるところがある。さらに，『事典』に「東京高商専攻科を卒業」と記載されている点に注目して，東京高商の後身である一橋大学を調査の結果，東京高等商業学校の創立40周年記念式典において松村が行った記念講演，「工業政策ノ根本問題　商学士松村光三」[31] と題する論文を一橋大学附属図書館で見出した。

ここまで調査を行った結果，『著者名典拠録』の松村光三が同名異人であって，問題の『賃銀論』著者の松村光三と『事典』収録の松村光三とは同一人物であるとの同定をなしたのである。

そこで，『著者名典拠録』であるが，『十六夜』著者の松村光三のデータのみで『賃銀論』著者の松村光三のデータがないまま，「松村光三は松村巨湫をみよ」の参照がなされたものと思われるが，この場合は「をもみよ」参照，あるいは「松村光三（1895—）は松村巨湫をみよ」の参照が適切と考える。

いま一つの例として河上清をあげよう。彼の著書『労働保護論』（M30）をみると二通りの著者表示をみるのである。標題紙には「川上清君著」とあり本文第一頁には「河上清著」，奥付は「著者　川上清」とある（傍点は筆者）。人名辞典上「河上清」を求めると，『辞書』にはなく『事典』初版に「川上清」を見出した。しかしその記述は「弁護士。財団法人京都感化保護院理事長。明治十一年八月三日京都府川上龍三の子に生る。……大阪ホテル，第一倉庫各株式会社の重役」とある。さらに調査をすすめると『事典』の復刻版である『日本人名大事典』の「現代」編（基本文献 Ⅱ (4)）に「河上清」が収録されていた。この方の記述は「ジャーナリスト，社会運動家。明治六年八月二日生れ……二十年代の終りに万朝報論説記者となり，キリスト教と社会主義に接近，足尾鉱毒事件で論陣を張った。同三十一年社会主義研究会，三十三年社会主義協会に入り……」とあり，該当著書の記載はないが現物調査の上，「現代」編

30）国立国会図書館収集整理部：参考文献〔31〕
31）東京高等商業学校：参考文献〔25〕p.145～180

に収録されている河上清を著者と同定した。

標題紙と奥付の著者表示が異なる例は，ほかにも藤井健治郎，浜田健二郎，西川光次郎などがあり，明治期刊行の文献にはこのような例が比較的多いため，利用者は注意をはらう必要がある。

これらの例からみていえることは，人名辞典の記述の中に著書の記載がなかったり，あっても極くわずかというところに問題があり，記述中に著書が記載されていれば，もっと容易に同一人物と同定できたと考える。

3．人名辞典への初収録時期

この調査を開始する段階では，人名辞典に収録されている経済学者127名について，経済学の輸入期である明治・大正期では著作と翻訳書とどちらを出版した時点で人名辞典に収録されるのか，との期待をもって作業を始めたが，実際は83名（約65.4%）が没後に収録されており，生存中に収録されたのは44名（約34.6%）にすぎなかった。このことより，初収録の時期が生存中の著作時か翻訳書出版時かの問題ではないことが明らかとなり，初めの予想が大きく覆される結果となった。

〈副表〉では，著・訳者名をヘボン式アルファベット順に配列し，『辞書』と『事典』のどの版で初めて収録されたかを一覧できるよう，初収録の版次とその刊行年を示した。さらに，生没年を合わせて記載することによって，没後何年を経ての収録であるかを明らかにした。なお，生没年に疑問があるが他の資料による確認ができなかったものは，辞典に記載の年をそのままゴシック体文字で示した。

〈副表〉　両人名辞典被収録著者・訳者の初収録版次

著者・訳者[32]	生年—没年	大日本人名辭書		大人名事典	
		版次・刊年[33]		版次・刊年	
安部磯雄	慶応1—昭和24（1865—1949）			初版現[34]	S12
天野為之	安政6—昭和13（1859—1938）			初版	S12
*粟津清亮	明治4—　？（1871—？）			初版現	S12
江木翼	明治6—昭和7（1873—1932）	11版	S12	初版	S12
圓城寺清	明治3—明治41（1870—1908）	6版	M42	初版	S12
藤井健治郎	明治5—昭和6（1872—1931）	11版	S12	初版	S12

32）著者・訳者欄の＊印付きの人名は『事典』初版で収録されたが改訂版では収録されていない。**印付の人名は初版で収録され改訂版では収録されなかったが，初版復刻版である『日本人名大事典』「現代」編（基本文献Ⅱ（4））に再び収録されている。

33）刊年欄のMは明治，Tは大正，Sは昭和を示す。

34）初版第7巻「現代人名」（基本文献Ⅱ（1））への収録を示す。

藤澤利喜太郎	文久1—昭和8（1861—1933）	11版	S12	初版	S12
福地源一郎	天保12—明治39（1841—1906）	6版	M42	初版	S12
福田徳三	明治7—昭和5（1874—1930）	11版	S12	初版	S12
福澤諭吉	天保5—明治34（1834—1901）	5版	M36	初版	S12
福住正兄	文政7—明治25（1824—1892）	3版	M29	初版	S12
濱田健二郎	万延1—大正7（1860—1918）	9版	T10	初版	S12
林董	嘉永3—大正2（1850—1913）	8版	T6	初版	S12
平沼淑郎	元治1—昭和13（1864—1938）			初版現	S12
平田延胤	文政11—明治5（1828—1872）	3版	M29	初版	S12
平田東助	嘉永2—大正14（1849—1925）	10版	T15	初版	S12
本庄榮治郎	明治21—昭和48（1888—1973）			初版現	S12
堀江帰一	明治9—昭和2（1876—1927）	11版	S12	初版	S12
*井上辰九郎	明治1—昭和18（1868—1943）			初版現	S12
井上友一	明治4—大正8（1871—1919）	9版	T10	初版	S12
犬養毅	安政2—昭和7（1855—1932）	11版	S12	初版	S12
石川暎作	安政5—明治19（1858—1886）	再版	M24	初版	S12
石川三四郎	明治9—昭和31（1876—1956）			現代[35]	S54
伊藤野枝	明治28—大正12（1895—1923）			初版	S12
神戸正雄	明治10—昭和34（1877—1959）			初版現	S12
金井延	慶応1—昭和8（1865—1933）	11版	S12	初版	S12
神田孝平	天保1—明治31（1830—1898）	4版	M33	初版	S12
金子堅太郎	嘉永6—昭和17（1853—1942）			初版現	S12
片山潜	安政6—昭和8（1859—1933）	11版	S12	初版	S12
加藤弘之	天保7—大正5（1836—1916）	8版	T6	初版	S12
加藤政之助	安政1—昭和16（1854—1941）			初版現	S12
河田嗣郎	明治16—昭和17（1883—1942）			初版現	S12
河上肇	明治12—昭和21（1879—1946）			初版現	S12
河上清	明治6—昭和24（1873—1949）			現代	S54
河津暹	明治8—昭和18（1875—1943）			初版現	S12
煙山専太郎	明治10—昭和29（1877—1954）			現代	S54
*氣賀勘重	明治6—？（1873—？）			初版現	S12
木下尚江	明治2—昭和12（1869—1937）			初版	S12
岸田吟香	天保4—明治38（1833—1905）	6版	M42	初版	S12
北澤新次郎	明治20—昭和55（1887—1980）			初版現	S12
小泉信三	明治21—昭和41（1888—1966）			初版現	S12
幸徳秋水	明治4—明治44（1871—1911）	11版	S12	初版	S12

35) 復刻版増補巻の「現代」編（基本文献Ⅱ（4））への収録を示す。

**窪田静太郎	慶応1—昭和21（1865—1946）			初版現	S12
呉　文聰	嘉永4—大正7（1851—1918）	9版	T10	初版	S12
栗原亮一	？—明治44（？—1911）	7版	T1	初版	S12
久津見蕨村	万延1—大正14（1860—1925）	10版	T15	初版	S12
桑田熊蔵	明治1—昭和7（1868—1932）	11版	S12	初版	S12
町田忠治	文久3—昭和21（1863—1946）			初版現	S12
前田正名	嘉永3—大正10（1850—1921）	11版	S12	初版	S12
松村介石	安政6—昭和14（1859—1939）			初版現	S12
松村光三	明治15—昭和37（1882—1962）			初版現	S12
松崎壽	明治19—昭和**10**（1886—**1936**）			初版	S12
松崎蔵之助	慶応1—大正8（1865—1919）	9版	T10	初版	S12
箕作麟祥	弘化3—明治30（1846—1897）	4版	M33	初版	S12
宮崎民蔵	慶応1—昭和3（1865—1928）			初版	S12
**村井知至	文久1—昭和19（1861—1944）			初版現	S12
武藤山治	慶応3—昭和9（1867—1934）	11版	S12	初版	S12
永田健助	？—明治42（？—1909）	6版	M42	初版	S12
中江篤介	弘化4—明治34（1847—1901）	5版	M36	初版	S12
中川小十郎	慶応2—昭和19（1866—1944）			初版現	S12
*中川正左	明治14—昭和39（1881—1964）			初版現	S12
中島雄	嘉永6—明治43（1853—1910）	7版	T1	初版	S12
西周	文政12—明治30（1829—1897）	4版	M33	初版	S12
西川光次郎	明治9—昭和15（1876—1940）			改訂	S28
西村茂樹	文政11—明治35（1828—1902）	5版	M36	初版	S12
野村兼太郎	明治29—昭和35（1896—1960）			改訂現	S28
乗竹孝太郎	万延1—明治42（1860—1909）	6版	M42	初版	S12
小幡篤次郎	天保13—明治38（1842—1905）	10版	T15	初版	S12
大石誠之助	慶応3—明治44（1867—1911）	10版	T15	初版	S12
岡田良一郎	天保10—大正4（1839—1915）	8版	T6	初版	S12
大森鍾一	安政3—昭和2（1856—1927）	11版	S12	初版	S12
*小野義一	明治9—昭和25（1876—1950）			初版現	S12
長田銈太郎	嘉永2—明治22（1849—1889）			初版	S12
大杉榮	明治18—大正12（1885—1923）	10版	T15	初版	S12
尾崎行雄	安政5—昭和29（1858—1954）			初版現	S12
佐田介石	文化15—明治15（1818—1882）	初版	M18	初版	S12
嵯峨正作	嘉永6—明治23（1853—1890）	再版	M24	初版	S12
堺利彦	明治3—昭和8（1870—1933）	11版	S12	初版	S12
酒井雄三郎	万延1—明治33（1860—1900）			初版	S12
**坂西由蔵	明治10—昭和17（1877—1942）			初版現	S12

阪谷　芳郎	文久3—昭和16（1863—1941）			初版現	S12
佐々木　惣一	明治11—昭和40（1878—1965）			初版現	S12
佐藤　寛次	明治12—昭和42（1879—1967）			初版現	S12
佐藤　昌介	安政3—昭和14（1856—1939）			初版現	S12
関　　一	明治6—昭和10（1873—1935）	11版	S12	初版	S12
澁澤　榮一	天保11—昭和6（1840—1931）	11版	S12	初版	S12
島田　三郎	嘉永5—大正12（1852—1923）	10版	T15	初版	S12
**清水　　澄	慶応4—昭和22（1868—1947）			初版現	S12
下村　房次郎	安政**3**—大正2（**1854**—1913）	8版	T6	初版	S12
品川　彌二郎	天保14—明治33（1843—1900）	4版	M33	初版	S12
白柳　秀湖	明治17—昭和25（1884—1950）			初版現	S12
添田　壽一	元治1—昭和4（1864—1929）	11版	S12	初版	S12
左右田喜一郎	明治14—昭和2（1881—1927）	11版	S12	初版	S12
菅沼　貞風	慶応1—明治22（1865—1889）	9版	T10	初版	S12
杉　　亨二	文政11—大正6（1828—1917）	9版	T10	初版	S12
鈴木　文治	明治18—昭和21（1885—1946）			初版現	S12
田口　卯吉	安政2—明治38（1855—1905）	6版	M42	初版	S12
田島　錦治	慶応3—昭和9（1867—1934）	11版	S12	初版	S12
田尻　稲次郎	嘉永3—大正12（1850—1923）	10版	T15	初版	S12
高橋　五郎	安政3—昭和10（1856—1935）	11版	S12	初版	S12
高橋　是清	安政1—昭和11（1854—1936）	11版	S12	初版	S12
高野　岩三郎	明治4—昭和24（1871—1949）			初版現	S12
高岡　熊雄	明治4—昭和36（1871—1961）			初版現	S12
高田　早苗	万延1—昭和13（1860—1938）			初版現	S12
高田　保馬	明治16—昭和47（1883—1972）			初版現	S12
瀧本　誠一	安政4—昭和7（1857—1932）	11版	S12	初版	S12
田添　鐵二	明治8—明治41（1875—1908）	10版	T15	初版	S12
*寺島　成信	明治2—　？　（1869—　？）			初版現	S12
戸田　海市	明治5—大正13（1872—1924）	10版	T15	初版	S12
東郷　　實	明治14—昭和34（1881—1959）			初版現	S12
徳富　健次郎	明治1—昭和2（1868—1927）	11版	S12	初版	S12
富田　鐵之助	天保6—大正5（1835—1916）	8版	T6	初版	S12
土子　金四郎	元治1—大正6（1864—1917）	9版	T10	初版	S12
*津村　秀松	明治9—昭和14（1876—1939）			初版現	S12
都筑　馨六	文久1—大正12（1861—1923）	10版	T15	初版	S12
内田　銀蔵	明治5—大正8（1872—1919）	9版	T10	初版	S12
内村　鑑三	文久1—昭和5（1861—1930）	11版	S12	初版	S12
上田　貞次郎	明治12—昭和15（1879—1940）			初版現	S12

浮田　和民	安政6—昭和20（1859—1945）		初版現	S12
和田垣　謙三	万延1—大正8（1860—1919）	9版　T10	初版	S12
山路　愛山	元治1—大正6（1864—1917）	8版　T6	初版	S12
**山室　宗文	明治13—昭和25（1880—1950）		初版現	S12
**山崎　覺次郎	明治1—昭和20（1868—1945）		初版現	S12
柳田　國男	明治8—昭和37（1875—1962）		初版現	S12
矢野　文雄	嘉永3—昭和6（1850—1931）	11版　S12	初版	S12
横井　時冬	安政6—明治39（1859—1906）	6版　M42	初版	S12
湯川　寛吉	明治1—昭和6（1868—1931）	11版　S12	初版	S12

〈副表〉によって明らかなように，没後収録といってもその時期は多様であって，物故直後に収録される場合もあるが，数版を経てやっと収録されるという場合もある。以下に，初収録時点別にみた人数を概観してみることとする。

〈初収録時点別収録数〉

1. 没後に収録されている—（83名）
  1. 1　物故直後刊行された版に収録されている—（71名）
    1. 1. 1　『辞書』・『事典』双方に収録されている—（65名）
      〔内訳〕　明治年間物故者（20名）
      大正年間物故者（21名）
      昭和年間物故者（24名）
    1. 1. 2　『事典』にのみ収録されている—（6名）
      昭和年間物故者（6名）
  1. 2　没後数版を経た後に収録されている—（12名）
    1. 2. 1　『辞書』・『事典』双方に収録されている—（7名）
      〔内訳〕　明治年間物故者（6名）
      大正年間物故者（1名）
    1. 2. 2　『事典』にのみ収録されている—（5名）
      〔内訳〕　明治年間物故者（3名）
      大正年間物故者（1名）
      昭和年間物故者（1名）
2. 生存中に収録されている—（44名）
  2. 1　『辞書』に収録されている—（0名）
  2. 2　『事典』の初版第7巻「現代人名」編に収録されている—（44名）
    〔内訳〕　昭和年間物故者（41名）
    物故年不明（3名）

4．著書記載の有無と精度分析

これまでの調査過程で明らかなように，人名辞典の内容記述には，著作活動を行う人物の記載事項として著書の有無が重要な要素となるが，経済学者の場合には，文学者に比べてその記載が比較的少ないといえる。

両人名辞典に収録されている経済学者127名（『辞書』72名，『事典』127名）について，その記述における著書の記載有無に関する調査を，『辞書』は9版と10版と11版，『事典』は初版と復刻版の「現代」編を対象として行った。結果は，著書が一点でも記載されている人物は『辞書』では42名（約58.3%），『事典』では89名（約70.1%）を数えたが，その記載著書中に「年表」採録の著書が含まれている人物は『辞書』で30名（約41.7%），『事典』で49名（約38.6%）であった。全く著書の記載がない人物は『辞書』に収録の人物中30名（約41.7%），『事典』収録では38名（約29.9%）となった。（表1参照）

表1『辞書』・『事典』に記載する経済学文献の著者・訳者

著書＼辞典		大日本人名辭書		大人名事典	
		人数	比率(%)	人数	比率(%)
辞典中に著書のある人	年表記載の本がある	30	41.7	49	38.6
	年表記載の本がない	12	16.6	40	31.5
	小計	42	58.3	89	70.1
辞典中に著書のない人		30	41.7	38	29.9
計		72	100.	127	100.

次に，記載されている書名についてみてみよう。人名辞典に収録の経済学者127名の著書として「年表」に採録されている文献数は，全部で333タイトルであるが，そのうちで人名辞典に記載の文献は，全部で113タイトル（約33.9%）であった。

各文献について書名の照合を行った結果，「年表」記載書名と辞典記載書名の間に相違を認めた文献は25タイトル（約22.1%）も数えることとなった。また，現物調査の結果「年表」・『辞書』・『事典』ともに誤りのある文献として2タイトルを見出した。それぞれの正・誤の件数と比率は〈表2〉にみるとおりである。

生没年表示については，『辞書』と『事典』改訂版との間での相違は比較的多くみられ，また不記載の場合も少なくない。

表2　「年表」・『辞書』・『事典』記載書名の正誤件数

辞典等 ＼ 正誤	年表		大日本人名辭書		大人名事典	
	件数	比率(%)	件数	比率(%)	件数	比率(%)
正	10	40.	5	20.	6	24.
誤	13	52.	5	20.	9	36.

（注）比率は相違をみた25タイトルに対するものである。

例えば，酒井雄三郎の生没年は両辞典とも記載されていない。従って，〈副表〉の作成にあたり生没年の調査については他の専門事典や専門書，あるいは自伝・伝記，年譜類を参照して可能なかぎり補記した。また，『事典』初版は皇紀を表示しているため，今となっては利用に不便を感ずることとなる。

著者名の読み方についても両人名辞典の間に相違をみることがある。その例として次に二，三をあげ，参考までに『著者名典拠録』の表示をも合わせて示してみよう。

	『辞書』11版	『事典』初版	『著者名典拠録』
1．犬養　毅	イヌカイ　タケシ	イヌガイツヨキ	Inukai Tuyoki
2．神田孝平	カンダ　コウヘイ	カンダタカヒラ	Kanda Kohei
3．呉　文聰	クレ　ブンソウ	クレアヤトシ	Kure Ayatosi
4．阪谷芳郎	——　——	サカタニヨシロー（よしお）[36]	Sakatani Yosio
5．高田早苗	——　——	タカタサナエ	Takada Sanae
6．高田保馬	——　——	タカダヤスマ	Takata Yasuma

それでは，正しい読み方は何であろうか。以下に，調査の手順と結果を述べることとする。

呉文聡の場合は，横山雅男の「副社長呉文聰君を吊ふ」に「君名を文聰と改めた時はアヤトシと讀むのであつた然るに後年は自分で音讀せられたことは統計詳説の表紙に Rectures on Statistics by bunso kure. と記してあるのでも判る」[37] とあるように，どちらも誤りとはいえないようである。この説は『呉文聰著作集　第三巻　伝記』[38] においても随所にみられる。

36）改訂版の読み。
37）横山雅男：参考文献〔38〕p.396（呉　建編：参考文献〔34〕に再録）
38）呉　文聰：参考文献〔33〕

神田孝平も2冊の一次資料に二通りの読み方を見出す。その一つは『神田孝平略傳』所収の「兵庫縣知事ヨリ元老院議員ニ榮轉セシ際同縣在留ノ外國人ヨリ贈ラレシ頌徳状写」[39]であり，その文中に Kanda Takahira とある。その二は，神田孝平の開成所の同僚である市川文吉が慶応元年，帝政ロシアへ留学するに際して，神田がオランダ語でしたためた送別の辞[40]の最後に，自ら C. F. Canda としるしていることである。これによって，Cohei ではないかと思われるが，F. については知ることができなかった。いずれにしても Takahira ではないと考える。

次に犬養毅についてみてみよう。『犬養木堂傳』に，「「毅」の讀み方に就ては，二三の異説があるが，初め「つよし」と訓まれたことは，今に遺る木堂の母堂嵯峨刀自の書簡に依つて明かである。又中頃之れを「つよき」と讀まれたことは，……自筆の履歴書に「ツヨキ」と振假名を施されたものが現に存してゐる。而して，後年には，世間の通用に従つて「き」と稱された。即ち「つよし」「つよき」「き」といふ順序になつてゐる。」[41]とある。「き」と読む説については，ほかにも横山雅男が「犬養首相の薨去を悼む」において，「帝國學士院授賞式に於ける祝辭の末にも犬養毅と高らかに發せられた平民宰相の聲は 今猶ほ耳底にあつて忘るゝことが出来ない」[42]と書いている。

以上により「毅」の読み方は判明したが，「犬養」の読みについては同伝記にも記述はみられず，単に「木堂の父源左衞門當濟の代迄は，犬飼で通つてゐたが，木堂の青年時代，上京前後，犬養と定め，……明治八年七月，木堂着京即日故郷の家兄に發せられた第一便に，既に犬養と署されてある。」[43]の記述をみるのみである。ほかに『木堂犬養毅』[44]『犬養毅傳』[45]にもこの点に関する記述はなく，現在の調査段階では「犬養」の読みについては明らかでない。

阪谷芳郎についても，「阪谷」の読みは，『阪谷芳郎傳』に「家は代々の造酒屋で，元来の本姓を坂谷と呼ばれたのも，その故であろう。」[46]「舊時サカヤと稱へてゐたのを改めてサカタニと呼ばれることになつた。」[47]，「子の姓を阪谷と書くやうになつたのは，公式にはこの分家届出以後の事に屬するのではないかと考へられる。」[48]等

39) 神田乃武編：参考文献〔29〕巻頭
40) 『幕末洋学者欧文集——友人及び同僚執筆 市川文吉送別文集——』 帝国学士院 昭和15年 所収。（「日本学士院紀要」35巻2号 別刷（昭和53年3月）として『「市川文吉送別文集」について——いわゆる幕末洋学者欧文集——』と改題，復刻）
41) 木堂先生傳記刊行会編：参考文献〔27〕上巻 p.4～5
42) 横山雅男：参考文献〔39〕p.201
43) 木堂先生傳記刊行会編：参考文献〔27〕上巻 p.4
44) 片山景雄編：参考文献〔30〕
45) 犬養毅傳刊行会編：参考文献〔28〕
46) 故阪谷子爵記念事業会編：参考文献〔32〕p.5
47) 同上書 p.10
48) 同上書 p.105

々の記述があるが，「芳郎」の読みについては記述されておらず，芳郎直系の孫にあたる阪谷芳直著『三代の系譜』[49]にも，詳しい系図があるにもかかわらず読み仮名は付されていない。

高田保馬については，『高田保馬博士の生涯と学説』[50]には読み方についての記述がないため巻末の著作目録により個々の著作にあたり，奥付の著者名に読み仮名の付してあるものを見出した。例えば，『利子論』[51]と『新利子論研究』[52]は「たかだやすま」と振り仮名があったが，『勢力説論集』[53]には「たかたやすま」とあり，ますます混乱するばかりである。最後に Kyoto University Economic Review に掲載の英文論文著者名 YASUMA TAKATA により，「たかた」が正しいと確定した。

高田早苗については，「早稲田政治経済学雑誌　総目録」[54]に「TAKATA, Sanae 高田　早苗　大学としての政治学経済学の過去を顧みて政治経済学部の使命に及ぶ……1」とあったが，第1号に掲載の同論文著者名にはローマナイズがない。また，追悼号（第63号）も簡単な著作目録の掲載はあるものの，手がかりとなるような記事はみられなかった。そこで，「早稲田大学と改稱後も引きつづき在任し，多年同大学学長を勤めた」との『事典』記事により早稲田大学大学史編集所に照会[55]の結果，「たかた」と読むとの回答を得た。

以上のように，人名の読み方についての調査は非常に困難である。より正確を期するには自伝・伝記等一次資料にさかのぼっての調査を必要とするが，その伝記等にも，読み方についての記述が少ない現状である。ここで，書誌情報の標準化のため，例えば伝記の編纂にあたっては被伝記者の姓名の読み方を明記することを，出版関係者には，出版事項として奥付の著者名に必ず本人又は関係者による正確な読み仮名を付記すること，また，雑誌論文においても執筆者名の読み仮名の記入を望むものである。

おわりに

以上，分析を試みてきた『大日本人名辭書』は，経済雑誌社社長として『東京経済雑誌』[56]を発行し終生自由主義経済を主張して活躍した田口卯吉（鼎軒）が，明治18

49) 阪谷芳直：参考文献〔35〕
50) 高田保馬博士追想録刊行会編：参考文献〔36〕
51) 岩波書店　昭和12年　567p
52) 岩波書店　昭和15年　346p
53) 日本評論社　昭和16年　272p
54) 早稲田大学政治経済学会編：参考文献〔37〕
55) 早稲田大学商学部教員図書室の関係者を煩わした。
56) 創刊号（明治12年1月）～第2138号（大正12年9月）。くわしくは，塩島仁吉編：参考文献〔9〕p. 6～10 および田口　親：参考文献〔11〕，杉村　武：参考文献〔10〕を参照されたい。

年に初版を刊行して以来，増訂を重ね大正10年に至るまでに９版の刊行に及んだが，大正12年９月１日の関東大震災によってその紙型を焼失してしまった。そこで，大正15年に新たに大日本人名辭書刊行会によって新版として第10版が刊行され，その後，昭和12年に前版以後の10年間のみならず，旧版にさかのぼって増補した新訂版として第11版を刊行したのである。このようにして，『辞書』は人名の集大成として，明治・大正・昭和の五十余年にわたって完成せられた，わが国における代表的な人名辞典としての評価を得ている[57]。このような出版の経緯をもつ経済雑誌社版『辞書』の最終版となった第９版と，刊行会による新版である第10版・11版を用いて精度分析に資した理由もここにある。

人名辞典のデータベース作成作業をすすめるにあたり広くわが国の人名辞典を概観していえることは，伝記的記述を主とするものが多く，いわゆる who was who や who's who 的な辞典を見出すことが少ないということである。

この点は，人名辞典の先駆となった『辞書』の編纂意図と大きく関係するところでもあろう。以下に『辞書』初版の田口卯吉による緒言を記すると，「余嘗て日本開化小史を著はし最も困難を極む故に凡そ事調査すべくして而して調査せざりしもの少なからず今日経済雑誌に従事し時に史上の事実を述ぶるを要することあり此際亦た成るべく之を避けて以て文を綴らんとせり何となれば一たび之を調査して而して文を綴らんとせば發兌の間に合はざればなり故に常に以て遺憾となせり」[58] と述べており，この遺憾としたところの解決を『辞書』編纂に求め，執筆活動を容易にしようとした[59]と考えると，伝記的要素の強いことも頷けよう。

従って，経済学分野において人名辞典に先人の伝記的事項を求める場合はかなり有効であるが，それにしても「年表」に採録されている経済学者の人名辞典への収録率が47.4%という低いカバレージには問題が残る。また，著書に関してはその記載が極端に少なく，「年表」採録文献（520タイトル）の人名辞典への記載率は約21.7%という状況である。これらは一般的な人名辞典の限界ともいえるもので，利用に際しては，他の専門辞典や各々の分野の専門人名辞典等[60]を併用することが望ましい。

次に，各版次間の記事を比較してみると，前版をそのまま用いる場合と稿を新たにする場合とあるが，前者の場合は，誤りがあればそれをそのまま受け継ぐこととなる。後者の場合をみると，版を重ねる毎に増補される反面，収録人数の増加と紙幅の制約

---

57) 『辞書』第11版の上田萬年による「序文」および11版復刻版の森谷秀亮による「復刻版刊行の序」を参照されたい。
58) 経済雑誌社：基本文献Ⅰ（１）p.1
59) この点に関しては，田口　親：参考文献〔11〕にも記述がある。
60) その一部については，参考文献を参照されたい。

等により，一人あたりの記事は簡略化される傾向があり，例えば，前述の松村光三や内田銀蔵など，改訂版では記述が極端に縮小されている。また，粟津清亮，井上辰九郎，氣賀勘重，中川正左，小野義一，寺島成信，津村秀松など（副表＊印の人名参照）のように，初版に収録されながら改訂版からは除かれている例もある。従って，一版のみの利用で事足れりとすることは不十分であり，旧版にさかのぼっての利用も必要である。このことから，大学図書館等においては最新版の所蔵のみでは十全ではなく，各版にわたっての所蔵を要することとなる。

人名辞典を利用する場合，ニーズのひとつとして例えば人名の読み方と生没年調査があるが，ここで展開した精度分析の結果をみても明らかなように，かなり多くの問題のある事を知ることとなった。それは，いわゆる孫引きなどによる誤りの継承も間々みられることであり，事々の正確を期するには，自伝や伝記・著作・日記など一次資料の利用を必要とすることは言をまたない。

（1987. 10. 21　稿）

基　本　文　献

Ⅰ　大日本人名辭書　経済雑誌社

(1)　経済雑誌社編：大日本人名辭書　1～4. 東京　同社　明治18～19年　4冊.

(2)　同上：同上　訂正増補再版　上・下. 同上　明治24年　2冊.

(3)　同上：同上　増訂第3版　上・下. 同上　明治29年　2冊.

(4)　同上：同上　増訂第4版. 同上　明治33年

(5)　同上：同上　増訂第5版. 同上　明治36年

(6)　同上：同上　増訂第6版. 同上　明治42年

(7)　同上：同上　増訂第7版. 同上　大正元年

(8)　同上：同上　増訂第8版. 同上　大正6年

(9)　東京経済雑誌社編：同上　大増補訂正第9版. 東京　同社　大正10年

(10)　大日本人名辭書刊行会編：同上　新版　首・上・下巻. 東京　同会　大正15年　3冊.（第10版）

(11)　同上：同上　新訂版　第1～5巻. 同上　昭和12年　5冊.（第11版）

(12)　同上：同上　1～5. 東京　講談社　昭和49年　5冊.（第11版復刻版）

(13)　同上：同上　1～5. 同上　昭和55年　5冊.（(12)の縮刷版. 講談社学術文庫）

Ⅱ　大人名事典　平凡社

(1)　平凡社編：新撰大人名辞典　1～9. 東京　同社　昭和12～16年　9冊.（第7巻　現代人名）

(2)　同上：大人名事典　1～10. 同上　昭和28～30年　10冊.（増補改訂新版. 第

9巻　現代篇）

(3)　同上：同上　1～6. 同上　昭和32年　6冊.（(2)の縮刷合冊版）

(4)　同上：日本人名大事典　1～6・現代. 同上　昭和54年　7冊.

（1～6は(1)の本巻6冊の復刻版.「現代」編は補巻として1938年9月～1978年8月の物故者を収録し1冊の人名辞典として独自に編集.（第1巻「『日本人名大事典』の刊行に際して」より））

Ⅲ　住谷悦治：日本経済学史. 京都　ミネルヴァ書房　昭和33年　440P.

（増訂版. 同上　昭和42年　454P.）

参考文献

〈参考図書〉

〔1〕　堀　經夫：明治経済思想史. 東京　明治文献　昭和50年　514P.

〔2〕　三橋猛雄編：明治前期思想史文献. 東京　明治堂書店　昭和51年　1056,72P.

〔3〕　杉原四郎：近代日本経済思想文献抄. 東京　日本経済評論社　昭和55年　344, xvip.

〔4〕　杉原四郎：近代日本の経済思想. 京都　ミネルヴァ書房　昭和46年　273,13P.

〈書誌〉

〔5〕　法政大学文学部史学研究室編：日本人物文献目録. 東京　平凡社　昭和49年　4,1199P.

〔6〕　前田昇三：「経済資料」.　日本経済学会連合編：『経済学の動向　第2集』東洋経済新報社　昭和57年,　P.711～724.

〔7〕　東京大学経済学部付属日本産業経済研究施設　伝記資料目録編集委員会編：東京大学経済学部所蔵　近代日本経済人伝記資料目録.　東京　東京大学出版会　昭和55年　253P.

〈田口卯吉・『大日本人名辭書』関係〉

〔8〕　しまね・きよし：田口卯吉と『大日本人名辞書』. 思想の科学　(63)　P.11～19　(6,1976)（臨時増刊号）.

〔9〕　塩島仁吉編：鼎軒田口先生傳. 東京　経済雑誌社　明治45年　433P.

〔10〕　杉村　武：近代日本大出版事業史. 東京　出版ニュース社　昭和42年　408P.（第8章　田口鼎軒と東京経済雑誌社　P.224～249）.

〔11〕　田口　親：田口卯吉と『大日本人名辞書』.　EDITOR　(50)　P.26～29　(10, 1978)

〈文献調査〉

〔12〕　天野敬太郎：「河上肇著作目録（経済学の部）」. 河上　肇：『河上肇著作集

第２巻』筑摩書房　昭和39年　P.335～453.
〔13〕 関西大学経商資料室：大正期経済関係翻訳書目録．吹田　同室　昭和56年 283P．（関西大学経商資料室目録シリーズ No.5）
〔14〕 河上　肇：河上肇著作集　第１・２巻．東京　筑摩書房　昭和39；39年.
〔15〕 慶応義塾編：福澤諭吉全集　第１・４・６・21巻．東京　岩波書店　昭和33；34；34；39年.
〔16〕 神戸大学附属図書館六甲台分館編：神戸大学附属図書館六甲台分館所蔵　明治期刊行図書目録．神戸　同図書館　昭和52年　400P．
〔17〕 神戸高等商業学校商業研究所編：経済法律文献目録　自大正５年至大正14年．大阪　宝文館　昭和２年　1316,7,34P．
〔18〕 国立国会図書館整理部：国立国会図書館所蔵　明治期刊行図書目録　第１・２巻・書名索引．東京　同館　昭和46；47；51年.
〔19〕 京都大学経済学会：経済論叢総目録　第１巻（大正４年）―第100巻（昭和42年）．京都　同会　昭和43年　352P．
〔20〕 内閣文庫：内閣文庫明治時代洋装図書分類目録．東京　同文庫　昭和42年 444,92,78P．
〔21〕 内閣文庫：内閣文庫大正時代刊行図書分類目録．東京　同文庫　昭和54年 149,31,25P．
〔22〕 大島　清：高野岩三郎伝．東京　岩波書店　昭和43年　503,８P．
〔23〕 太田重弘編：東京大学経済学部所蔵明治文献目録―経済学とその周辺．東京 同学部　昭和44年　237,59P．（和書主題別目録５）.
〔24〕 高村象平；小松芳喬編：封建制と資本制　野村博士還歴記念論文集．東京　有斐閣　昭和31年　743P．
〔25〕 東京高等商業学校：創立四十周年記念講演及同祝典記事．東京　同校　大正５年　266P．
〔26〕 上田貞次郎：上田貞次郎全集　第７巻　新自由主義．東京　上田貞次郎全集刊行会　昭和51年　821,48P．
〈著者名の読み方調査〉
〔27〕 木堂先生傳記刊行会編：犬養木堂傳　上・中・下巻．東京　東洋経済新報社 昭和13；14；14年.
〔28〕 犬養毅傳刊行会編：犬養毅傳．同会　昭和７年　393P．
〔29〕 神田乃武編：神田孝平略傳．東京　神田乃武　明治43年　43P．
〔30〕 片山景雄編：木堂犬養毅．東京　日米評論社　昭和７年　722P．
〔31〕 国立国会図書館収集整理部：国立国会図書館著者名典拠録　明治以降日本人名．

東京　紀伊国屋書店　昭和54～60年　5冊.
〔32〕 故阪谷子爵記念事業會編：阪谷芳郎傳. 東京　同会　昭和26年　714 P.
〔33〕 呉　文聰：呉文聰著作集　第3巻　伝記. 東京　日本経営史研究所　昭和48年　415 P.
〔34〕 呉　建編：呉文聰. 福岡　呉建　大正9年　272 P.
〔35〕 阪谷芳直：三代の系譜. 東京　みすず書房　昭和54年　369 P.
〔36〕 高田保馬博士追想録刊行会編：高田保馬博士の生涯と学説. 東京　創文社　昭和56年　538 P.
〔37〕 早稲田大学政治経済学会編：早稲田政治経済学雑誌　総目録（第1号～第200号）. 東京　同会　昭和41年　208 P.
〔38〕 横山雅男：副社長呉文聰君を吊ふ. 統計学雑誌　(391)　P. 391～396　(11, 1918)
〔39〕 横山雅男：犬養首相の薨去を悼む—殊に統計関係者として. 統計学雑誌　(552)　P. 199～201　(6, 1918)
〈生没年調査〉
〔40〕 日外アソシエーツ株式会社編：昭和物故人名録（昭和元年～54年）. 東京　同社　昭和58年　747 P.
〔41〕 日本歴史学会編：明治維新人名辞典. 東京　吉川弘文館　昭和56年　1096 P.
〔42〕 中村　哲；丸山真男；辻　清明共編：政治学事典. 東京　平凡社　昭和40年　1416, 80 P.
〔43〕 大河内一男；吾妻光俊編：労働事典. 東京　青林書院新社　昭和40年　1261 P.
〔44〕 塩田庄兵衛編：日本社会運動人名辞典. 東京　青木書店　昭和54年　664 P.
〔45〕 高橋泰蔵；増田四郎編：体系経済学辞典　第6版. 東京　東洋経済新報社　昭和59年　1314 P.